Shirayuri College

在米日本人「移民地文芸」覚書（4）「太い根が必要だ」
——外川明の自由詩戦前編

粂　井　輝　子

はじめに

外川明（1903—1980）は山梨県南都留郡船津村に生まれた。父定一は、1907年に渡米した。焼失した家の再建で負った借金返済のためであった。数年で帰るつもりであったというが、祖母の死後に送金が途絶え、一家は困窮した。外川は家計を助けるため、さまざまな仕事をした。1922年、音信不通であった父が突然帰国した。翌1923年、父に伴われて渡米した。ほどなくして父と離れ、ロサンゼルス市に移り、三浦農産商会に勤務、1927年第七市場の支店マネージャーとして経営を担った。1929年、帰米[1]女性のきみと結婚した。第二次大戦中はポストン収容所に収容された。戦後も農産物販売の経営に携わった。1952年、渡米後はじめての故郷訪問を果た

1　「帰米」とは、アメリカに生まれながらも、教育を日本で受け、ある程度大きくなってからアメリカに戻った二世をさす。日本で育ったために二世よりも一世に心情的には近いと言われる。ときに差別的ニュアンスがあるとも言われるが、一世（アメリカに移民した日本人）、二世（アメリカ生まれの日系人の第一世代でアメリカ市民権をもつ）などとならんで、呼称として定着しているので、ここでもその用語を使った。

本稿は「在米日本人『移民地文芸』覚書（1）アメリカの『亡者』——翁久允の長編二部作「悪の日影」と『道なき道』」『白百合女子大学紀要』41号（2005年）117—134；「在米日本人『移民地文芸』覚書（2）『我が名を永遠に』——自由律俳句と直原敏平」*SELLA* 35号（2006年）15—26；「在米日本人『移民地文芸』覚書（3）「かへらぬふるさと」——下山逸蒼と自由律俳句」『白百合女子大学言語・文学研究論集』7号（言語・文学研究センター2007年）53—63に続くものである。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

した[2]。

経歴が示すように彼は職業詩人ではない。しかし、日々の労働の傍ら、作品を羅府新報の文芸欄に投稿し続け、戦前は『収穫』、戦中は『ポストン文芸』、戦後は『南加文芸』の文芸活動に参加した。戦前には『詩集』(1932年)、戦後は『蜜蜂のうた』(1962年)を自費出版した。また、『南加文芸』に27回にわたって「南加詩壇回顧」を執筆した[3]。

外川明を知る人は彼を温厚な人で、世話好きだったという。しかし戦前からの長い活動歴をもちながらも、文芸会のリーダーと目されていたわけではなく、同世代の加川文一の影に隠れ、目立たない存在であった。英詩集を出版し、カリフォルニア州の詩壇から着目されたことのある加川の哲学的思索をめぐらした詩[4]に比べると、外川の詩は文学青年的感傷が強いと思われるからであろう。とはいえ、山本岩夫は『収穫』での外川の詩を、日常生活をテーマに採り、「深い思索と洗練された語法に支えられ」ていると高く評価している[5]。山本の指摘するように、外川は自らの生活から詩を生み出した。移民の暮らしと哀感を詠み込んだ。移民地の生活と心情の記録としてもっと注目してよいであろう。

本稿は、外川の『詩集』と日記を中心に、彼が日系人としてアメリカに

2　外川明『詩と随想　蜜蜂のうた』(東京アポロン社、1962年) 430—431。また UCLA Research Library 特別資料室外川明文書の文献目録にも略歴が記載されている。この目録内容は現在インターネット Online Archive of California でも閲覧できる。

3　『収穫』、『ポストン文芸』、『南加文芸』は篠田左多江・山本岩夫編『日系アメリカ文学雑誌集成』(全22巻　東京不二出版、1998年)の、1、8－12、16－22巻に収録されている。

4　加川は Yvor Winters の序文を得て、*Hidden Flame* (Stanford, CA: Half Moon Press, 1930) を出版した。また、House of Henry Harrison, Publisher ed., *California Poets: An Anthology of 244 Contemporaries* (NY: the House of Henry Harrison, Publisher, 1932) にも英語詩数点が収録されている。

5　山本岩夫「幻の文芸誌『収穫』」篠田左多江・山本岩夫編著『日系アメリカ文学雑誌研究 —— 日本語雑誌を中心に』(東京不二出版、1998年) 24。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

生活の基盤を築こうとする軌跡を考察するものである。

1）アメリカの夢、成功の夢

外川明の父定一は明が満3歳のときに渡米した。次弟は父の渡米の翌年に生まれた。以後17年、父というものを知らず、母と祖母に育てられた。15歳で祖母が死ぬころ、父は音信不通になり、送金も途絶えた。生活は困窮し、先祖伝来の財産も、親戚に買い取ってもらわなければならなくなった。外川も養蚕などの農作業の他、道路修繕人夫、富士登山の強力、農閑期の行商をした（『蜜蜂のうた』430）[6]。後年、外川は故郷の生活を次のように記している。

> 十七の私の丹精で／桑畑を青々と繁らせて／村人から誉められた記憶／母と共苦労の養蚕で／繭一貫を十八円で売つて喜んだのも／もう拾年も前なのか
> 貧しくもその頃は／希望に満ち溢れてゐた私だつた／貧しくもその頃は／故郷の土に親しみを持つてゐた私だつた／だがもう懐しい故郷は／ただ懐しい丈の故郷で／私を優しく抱いて／育んで呉れる故郷ではないのだ。
> お母さん／一日も早く帰れと言はれても／帰つてからどうして食つて行くのですか／桑の葉一貫が六十銭／繭一貫が二円五十銭／それで借金せずに暮らして行けますか／百姓の汗の償ひは／一体誰が為して呉れるのですか／懐かしく開いた母の便りではあるが／読み終へた私の心は真暗にされて仕舞つた（「暗い故郷」『詩集』205－6）

故郷は懐かしい。母の手紙は待ち遠しい。けれども、懐かしさだけでは

6　末弟は父と外川が渡米後に生まれた。「移民の子」『詩集』26－27。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

暮らしはたたない。将来に希望をもって働き、近隣から褒められる畑を作っても、いかに品質のよい繭を高額で売ったとしても、借金せずに暮らすことはできなかった。生活費の補填に、東京に行商にでても、無理がたたって、18歳のときには3ヶ月も寝込む大病を患った（『蜜蜂のうた』431）。自分を育むことのできない故郷。その故郷に見切りをつけて渡米したのであった。帰国を催促する母の手紙は、故郷の貧しさを思い出させただけでなく、10年を経ても、故郷で遊んで暮らせるだけの「成功」を勝ち取れない現在の自分のふがいなさを痛感させるものであった。

外川もまた、他の多くの移民たちと同様に、アメリカに甘い夢を抱いてやってきた。父の帰国は、呼び寄せであろうと予測し、健康に自信がなかったが、アメリカに行ってみたいという想いはあった。「母の余生を安心して暮せる様に」するために父の誘いに応じた。(1922年7月16日)。[7]

アメリカの光景は外川の心を浮き立たせた。ハワイ島は「唯珍しく唯美しく唯麗しく唯長閑」であった（1923年3月5日)。サンフランシスコに到着したときはハワイほどの感激はなかった。1、2等船客だけが先に降りたのが「癪にさはつてたまらなかつた」が、それでも「上で鴎が楽しそうに叫ぶ、船が着いたよもう船が」と浮き浮きした気分を詠んでいる(1923年3月11日)。移民局のあるエンゼルス島に送られたのは「罪人」扱いされた気分であったが、「想像意外［ママ］に美しい島」であった（3月12日)。身体検査後、入国を許され、サンフランシスコの防長ホテルに一泊して、汽車でサリナスに向かう。柔らかな陽射しの太陽、桃の果樹園や「菜の花」[8] が続く平原、「春だ、楽しい長閑な春だ、少しも異国のさびしさを感じない」。旧友と会い「うれしくてうれしくてたまらなかった」。そして、友の「妹と弟肥へた体だ自分［は］羨ましくてたまらなかった」。(3月15日)。アメリカの豊かさの証を目の当たりにしたからであろう。

7　（　）内は日記の日付である。
8　マスタードの花であろう。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

自動車に同乗してターラックに向かう。「緑の薫る果てしもない広野の広路を軟らかな春日を浴びつつ自動車で走る、何とも云はれぬ爽快と長閑を感じた」。このあたりの丘陵地帯はなだらかで広々としており、山梨の山村に育った外川には大草原に思えたであろう。オレンジ色や黄色の花がやわらかな緑の草原に咲いている。牛馬が草を食む。それがどこまでも続く。「何を見ても珍しい物ばかり流石米大陸の景色は格別だ」と感激した（3月16日）。

各地の知人と旧交を温め、ロサンゼルスに行く。ここで、会った知人が、「言葉も出さずに涙をこぼす彼女に異郷のさびしさをよび起こされる」（3月19日）。浮き浮きとした「旅行者」気分が消える瞬間である。翌20日の日記の冒頭には「憧れて来し人々に会ひ終へて心淋しくなりそめにけり」と記している。明日からは言葉もわからない「異国」で新しい労働を始めるとなると、「すずろ悲し［い］」。新生活に緊張しているというよりはむしろ、楽しい休暇が終わってしまったという侘びしさだったのであろう。父はハリウッドで職を探すという。外川は、父と別れ、ロサンゼルスの市場に店を構える、苦労人らしい三浦清兵衛の店で働きながら独学しようと決意した（3月21日）。

朝8時からの「マーケット」働きに、「がりつき（ガーリック）の選定などをする埃が立つのには少々閉口［し］」（3月22日）、「時々外人[9]が来るのには閉口」した（3月23日）。それでも10日ほどで、

手真似してアニオン［onion］少し商ひてそぞろうれしきマーケットの朝
おのづから心嬉れしくなりにけり手真似しつつも小商ひして
ハマチー［how much］と問はるる度におづおづとしつつもなれぬ英

9　日本人移民はしばしば白人を「外人」と呼んだ。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

語話しぬ

と詠んでいる。晩には教会の集会に参加している（4月4日）。5月11日、電車を待っていると、通りすがりの「外人」が自動車に乗せてくれた。その人情に感激し、聞いていた「排日」とは何だろうと疑問に思っている。朝4時起き、11時就寝の生活ではあったが、新しい土地で頑張ろうとする意欲と少しずつ「外人」相手に商売ができるという喜びが伝わってくる。

しかし7月には、早くも甘い成功の夢は挫折感を味わう。曇天に、気分まで沈む。「悲感［ママ］して涙をこぼす程の勇気もなくなった」。そして、「成功も覚束ぬと思ふ時故郷の事を偲ぶ時無限に自分の身がうらまれる」（7月6日）。「自由の国！唯此れだけに誘はれて来た自分の嗚吁何をして居るのか何処を探しても俺の自由は見つからぬ余りに意気地がなさすぎる」（7月12日）、「耐へよ！忍のべ、唯一人で！」と言い聞かせても、「仕事を終へて帰る時得も云はれぬ淋しさを感じる」が、何もできない。「しみじみ一人で泣いて見たい！此れが私の希望か！」（7月20日）。早朝から夜までの勤務に自由時間はない。見習いの身では貯金さえままならなかったであろう。独学など、夢でしかない。渡米したときの大きな夢が破れ、一人泣くことが希望となってしまった現在の境遇に、愕然とするのである。

2）米化と排日の狭間で

当初期待していた成功はおぼつかなくても、アメリカの生活に慣れるにしたがって、ホームシックに落ち込むことは少なくなる。と同時に、漢字を忘れ、故国の大事な記念日さえ忘れるようになる。1924年5月27日には、海軍記念日を忘れていたことに衝撃を受けて、「米化して行く／排斥されつつしひたげられつつも」、と記している。排斥差別されながらも、差別する側に飲み込まれて、本来の自分を失って行くことへの哀しみが、「米

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

化して行く」という言葉に感じられる。

1924年には排日移民法と呼ばれた移民法が成立する[10]。発効した7月1日の日記には、

> 移民法案実施日排日家の亜米利加人は大成功大喜びだらう国辱日だ愛国の徒は日比野［ママ］の野に国技館に集い憤怒極りなき熱弁を吐く故国の光景が新聞紙上に発表された……在米の同胞即ち問題の発源者は如何佐程深く感じては居らぬらしい、俺もやっぱりだ、排斥されても侮辱されてもああやっぱりアメリカは良い所と云ふのか　三十七才まで、否終生独身の命令に甘んじても[11]

と記している。自分自身を含め、当事者たるアメリカ在住の日本人は憤りをあまり感じていない。排斥され続けて、意気地を失ってしまったからか。それとも日本よりもアメリカの方が排斥があっても暮らしやすいからか。

経済面を考えれば、外川は金儲けのためには何事も耐えなければならなかった。父の送金は借金だった（7月15日）。母への送金に父の借金返済が加わった。労働は厳しい。

> 何と言ふ矛盾だ／椰子を育む南国の大地だのに／果てしなく続く冷たい路よ／歩いても　歩いても／何時大地の温さを感ずる日が来るのか

10　1924年移民法に「排日条項」が挿入された経緯に関しては、蓑原俊洋『排日移民法と日米関係』（東京岩波書店、2002年）、また、同法成立に関する日本国内での反響に関しては、拙論「『日米問題』に関する一覚え書き：1924年アメリカ移民法に対する『ジャパン・タイムズ』紙上シンポジュームにみる日米認識の落差」『白百合女子大学研究紀要』33号（1997年）69—88。

11　1924年移民法の成立の結果、日本からは新たな「移民」が不可能となった。それまでは日本側の自主規制によって、すでにアメリカに居住する移民の配偶者、親、子の入国は可能であった。日本で入籍し妻として渡米する女性への旅券発給は、日本側が1920年に停止した。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

／可哀想に　俺の足！
裏富士の高原に／下駄と草履を踏みしめて／自由に大きくなつたお前だのに／窮屈な靴に押し込められて／靴擦れの痛さを忍びつつ／熱い大地の接吻を求めて／夜となく　昼となく／長いこと歩み続けては来たが／何処までも続く路の冷たさに／今は血の気も失せ果てて／青白く冷たいお前だ（「俺の足」『詩集』128－129）

ロサンゼルス市街地の道路は舗装され、歩きやすそうに見える。椰子の並木は南国を思わせる。けれども朝晩は冷え込む。幅広の足には細い西洋人向けの靴は窮屈である。しかも労働靴は固くて重い。むりやりに靴に足を押し込め、日の出前から夜遅くまで、終日歩き続ければ、靴ずれもできる。タコもできる。「俺の足」は外川そのものである。甘いアメリカの幻想に誘われてやってきたものの、窮屈な蔑視のなかで働き続ければ、心は傷つき癒される間もない。

そんなアメリカの労働生活ではあるが、日本の生活はなお厳しい、と外川は思う。

働いても喰へぬ百姓に諦めを付け／江戸児相手の行商も病の為に挫けて／取り付く島［ママ］もなしにやつて来た／このアメリカがいやになつたら／俺よ　一体何処へ行く（「仰臥想」『詩集』95）

答えは明らかである。しかし、アメリカに留まる限り、移民法の規定で、母を呼び寄せることはできない。カリフォルニア州法の規定で日本人は白人女性と結婚はできない。「米国生まれの日本娘は日本語を話さ［ない］」（「何故俺は」『詩集』18）。金儲けのための労働と性の悩みに、1920年代の外川の詩は感情の起伏が大きい。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

気分が爽快なときには、車窓から

メキシカン達よ／俺はお前等が一番好きだ／そして俺はお前等の好きな日本人だよ／このアメリカに色違いの俺達は／あの我儘な米国人の分らず家の為に／何時も侮辱されて居るのだ／癪に障るぢやないかメキシカン達よ／血と愛と正義のシンボルの／星条旗のひるがえる大空の下に／血も正義もない排斥をされるのだ／おお赤銅色の健康な群れよ！／お前等はみんな俺の子分になつて呉れ／そして俺と一緒に馳けて呉れ／リンカーンの肺から絞り出したやうな／人類愛の空気がはちきれるまでに膨らました大きなボールを抱えながら／正義の道をまつしぐらに馳けてくれ／馳けてくれ、馳けてくれ／あの蹴球のチャンピオンのレツド、グレンヂ[12]のやうな素晴しい勢いで／突進する俺達に邪魔する輩は／片端から突き跳ばしながら（「車窓に凭れて」『詩集』6－8）

と呼びかける。アメリカは自由と平等と博愛を標榜している。にもかかわらず、メキシコ人や日本人は有色人種として排斥されている。排斥される者がリンカーンの人類愛で団結して、一緒に、アメリカの矛盾を蹴散らそうと、この詩は叫んでいる。けれども、実際にはこの叫びは狭いアパートのなかでの呟きでしかない。とはいえ、外川ら一般の移民労働者がアメリカの矛盾を熟知していたことは無視できない。

鬱状態になれば、カリフォルニアの明るい太陽も、暗いしとしとした雨も気分を沈ませる。

冷たい雨だよ／それは私の泪だよ／終日働いて帰つたからとて／お帰

12 Horald Edward Grange (1903—1991).

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

り……と言つて／迎える者は一人もないが／門に待つてゐたよ／新聞紙が待つてゐたよ／グツシヨリ冷たく濡れたまま（「冷たい雨」『詩集』41）

蝙蝠よ　出て来い／憂鬱の穴の巣を喰つて［ママ］ゐる／俺の蝙蝠よ出て来い／明るく輝くこの春の広野に
（中略）
何と言つても蝙蝠は出て来ずに／薄暗い天井裏に師噛み［ママ］付いてゐる／何故こんな俺になつたのが［ママ］／緑草の上に座つて／枯草の残茎をボギリボギリ折つてゐると／故知れぬ涙が滲んで来る（「蝙蝠」『詩集』87－88）

「グツシヨリ冷たく濡れた」新聞が外川自身の姿に重なる。待っていてくれた新聞はいじらしい。けれども、新聞だけしか待っていない侘びしさが言外に沁みだしてくる。明るい広野に飛び出してこないコウモリは、外川の心の中の言葉である。叫びたい言葉は胸の奥にあっても、それを声高に叫んで聴いてもらう勇気はない。聴いてくれる相手がいない。

生来真面目な外川は酒や女や博打でうさを晴らせない。雨上がりの夕方に空を舞う凧をみても、それは「寒風にうめきながら」「悶え苦しんでゐる」。だから、「理性の糸をプツツリ剪つて／このまま／風に身をまかせて空を飛んで行きたい」（「紙鳶」『詩集』85－86）。野を横切る列車に飛び乗って、「凡てを委せて仕舞つて／このまま俺は／何処かへ行きたい」（「汽車」『詩集』93）。さもなければ、突然爆発炎上した石油井戸のように、「僕の理性は戦慄する／年毎に深くなる憂鬱の井から／何時このやうな焔が爆発するかも知れないと思はれて」（「狂乱の焔」『詩集』127）。

三浦の店を離れて、地方の農園労働をしたときであろう。同じ労働キャ

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

ンプの老人から葡萄酒をすすめられた。禁酒法の時代[13]である。酒は密造である。しかも当時の外川は宗教的信条から禁酒していたと思われる。だが彼は一緒に酒を酌み交わす。

悦んで受けやう／感謝して受けやう／額は少し禿げかかり／顎髭に白毛の見ゆるまで／日本にも帰らずにゐる／この年老ひし人の／甘い手製の葡萄酒を
（中略）
宗教も知らず　／芸術も解らぬこの人だが／知つてゐる　識つてゐる／俺達の何十倍も知つてゐる／移民地の寂しさを／独身者の悲しさを
疲れたらう　一杯やりねぇ／ほんとうだ……ありがたい／俺れは疲れて仕舞つたのだ／この人は猶更疲れたらう／お互だ　お互だ／旅の愁はお互だ／六十に近いこの人も／人生半ばのこの俺も
心から差出して呉れたこの尊い杯を／どうして俺は拒まれやう／譬え酒飲むことが神の法に違ふとも（「葡萄酒の味」『詩集』61－64）

長年独り身で暮らしてきた老移民に自分の将来を重ね、自分自身の孤独を重ねて、二人は杯を交わす。「移民地の寂しさ」、「独身者の悲しさ」の底にあるアメリカ社会の理不尽さは、酒がもたらした二人のつかの間の友情に覆われてしまった。日本人労働者が苦しんだ労働問題や人種問題は外川個人の宗教の問題にすり替わってしまった。

外川は、社会の矛盾を自覚しても、それを告発することはなかった。「古フオードと／破れ箒とエツプンと／今日も仲よく一日暮れ」と日々の労働に精をだし、「読みたいなア／書きたいなアと思ひつつ／今夜も疲れ

13　酒の製造、販売、輸送を禁じたアメリカ合衆国憲法修正18条は1919年発効し、1933年廃止された。

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

て寝て仕舞ふ俺だ」った（習作の口語歌『詩集』101）。とはいえ、疲れてもなお「書きたい」という想いは持ち続けた。その想いが「憂鬱の井」のはけ口となった。

根をおろす

「共に苦労の出来るやうな娘や／ないか加州の第二世」（「仰臥想」『詩集』99）とあきらめていた外川ではあるが、帰米女性きみと1929年に親の反対を乗り越えて結婚した。親の知らない女性であること、長男がアメリカで結婚すれば帰国は遠のくこと、結婚すれば送金が少なくなること、そうしたことが反対の理由であったのであろう。とはいえ、外川には「すべては運命」だと思われた。父の借金も背負っての労働は灸をすえなければ続かない。店は経営困難であった。

> 胸は詰まる　肩は凝る／眼までかすむこの苦痛／得も言へぬ寂寥の風が／スーツ　スーツ　頭を掠めて通る／冷たいセメントの床の上／六年の激労に／すつかり冷え切つた体を／やいと［灸］に焼かせながら／静かに運命を考えてゐる（「苦闘の春」『詩集』136－137）。

故国に帰っても先の見通しがつかないのであれば、この機会を逃せば永遠に自分をいたわってくれる伴侶には恵まれないであろう。

「詩の相手には／少し物足らなくも思ふ」が毎夜念仏を唱える慎ましさが気に入ったようであった（蜜月日記『詩集』158－159）。「星より星への働きも／辛い時もあるけれど／お帰り　と言つて迎えるものがあればこそ」生活に張りがでる（「小窓の灯影」『詩集』170－171）。

これまで憂鬱にしか見えなかった雨期の街も、「煤と埃に汚れながらも／路傍樹は緑の詩を描いて／この灰色の街を／春らしく生さうとしている

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

のです」と断言できる。「欲しいと思つた白百合も買はずに／復活祭も過ぎて仕舞つた」が、貧しくとも希望がある。「児は若芽と共に伸びて行く」。親となれば、日々の労働には間近な目標と褒美がある。「睡りたる児の頬に／そつと接吻して外にでると／黎明の小鳥が私の労働を讃美して呉れる」。休むことを知らない労働でも、「激しい翅の振動にも／蜜蜂は蜜蜂のうたをうたひながら／涯しない緑の広野を／何処までも健かに飛んで行く」(「蜜蜂のうた」『詩集』188－190)。蜜蜂のように、果てしなくどこまでも詩を書き続けながら、頑張るのだという気概が溢れている。

とはいえ、「大恐慌時代」である。日記には点灸と売り上げ高に一喜一憂する記述が多い。実の父母と妻の父母への送金に加え、子供が生まれる。子供の誕生は活力の源であったが、経済的負担でもある。借金の返済もままならず、生活は苦しい。

渡米以来の九ヶ年余を／殆どあの目苦しい青物市場に働き／毎日　吾ものならぬ金の勘定と／薯や玉葱の撰り分けをしながら／過ごして来た俺の手に／一体何が残つた？／妻と　子と　古フオード一台と／束にした送金の受領証／そして取戻した借用証書と／出版出来ない拙い詩集

冬毎に血の滲み出す／絲取る甲斐の母の手よ／夜遅くまで筵を織りながら／義妹と侘びしく暮らしてゐると言ふ／未だ見ぬ広島の義母の手よ／都会生活に行詰り　不慣れな苺摘りに行き／ひび割れて帰つて来た義父の手よ／可哀想な是等の手が槍になつて／俺の心臓を刺すけれど／如何にしても解決は付かないのだ／たつた二つの俺の手だけでは／でも俺ばかりぢやない／「働けど働けど我暮し」と／掌に吹きかけた啄木の溜息は／凡ゆる労働者の掌から掌へ／何処までも　何処までも流れて行く

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

働いても働いても、物心ともにゆとりある生活は訪れない。「啄木の溜息」は外川の溜息でもある。そして実母、義母、義父の溜息である。市場の働き手の溜息である。それでも溜息は果てなく「何処までも流れて行く」だけで、「労働者の掌」には何も残らない。

この詩は、海に投身自殺した友の手、市場のゴミ箱を漁る貧しい女性の手、土地法に縛られる日本人移民の手、道路工事で傷ついたメキシコ人の手、戦死した兵士の手と続く。これほど「惨酷」でも「戦争を熄められない／人類なのだ」と外川は語る。そして一転、「偉大な愛の腕を拡げて／凡ゆる人種を平等に抱いてゐる／南カリホルニアの夏の海よ」と呼びかけて、この詩は終わる（「手」『詩集』256－260）。この詩の唐突な終わり方は、これほどの理不尽があっても、それでも南カリフォルニアの方が恵まれていると語っているのであろうか。

日本よりも他のどこよりも、ここより他に行くところがないとすれば、不景気でも差別があっても、ここに根を張るしかない。「もどかしい妻の内職に／雨の夜が冷々と更ける」。「生やさしいことぢやない／妻を持ち児を育て／四人の親を支持［ママ］すること」。自分が持っているのは、「部厚な俺の掌／ただこれだけだ／希望も　力も　財産も」我が手にかかっている。「冬といふ不景気の季節には／地中深く喰い込んで行く／太い根が一本必要なのだ」。（「太い根が必要だ」『蜜蜂のうた』141－143）

「葉のため　枝のため　幹のために／自らは暗き方へ　暗き方へと伸びてゆく／草木の根」は、ときとして、「暗き方へ　暗き方へと伸びゆきて／暗き地中にそのまま朽ちる」場合がある。従兄がそうであった。「親を　兄弟を　妻子を思ひつつ／ただ独り異国に／酒も飲まず　女に眼もくれず／営々として蜜蜂の如く／十有余年働き続けし我が従兄！」であった（「埋もれし根」『詩集』69）。自分自身もアメリカで日本の家族を支えるために「暗き方へと伸びてゆく」根となってきた。けれども、「暗き方へ」

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

伸びた根はただ黙々と根を伸ばそうとしただけであったが、「太い根が一本必要なのだ」と言い切ったときには、アメリカの不景気を乗り切り、アメリカに家庭も財産も築いて行く自覚が感じられる。「太い根」があれば、木は多少の逆境にも繁茂できる。父ががっちりとした基盤を造れば、子供らは大きく成長する。「明い日が近づいて来ます／貧乏のどん底から／地中深く食ひ込んだ私の根が／梢に枝に芽をふくらまして／やがて緑に茂る日が」来るであろう（「健やかな靴『詩集』223」）。

暗雲

1932年、外川は念願であった『詩集』を出版した。店の経営に追われながらも、書き続けること、「それだけが心の窓の灯であつた」（『蜜蜂のうた』172）。世の中は不景気ではあったが、文芸活動は盛んであった。仕事に追われ、灸をすえながらも、詩作を続け新聞に寄稿した。

> そして土曜日はよい売って売り上げが多かった努力だ努力だ、奮闘を続けて行かなければ駄目だ、姉に点灸して貰って夕食してかうして日記を書いている大分疲れてもゐるが気持ちがよい、為るだけの事を為った後は気持ちよいものだ（1935年4月22日）。

努力を続けること、それが外川の満足であったようだ。しかし1937年、農産物価格の急落で、三浦農産商会は大きな損失を蒙った。その年、経営者は死去、外川が再建を担って行く。仕事への没入と子供の成長で、故郷はそれほど懐かしいものではなくなる。「何時とはなく故郷を恋ふ心の失はれて行くのは喜であるか悲であるか、故郷は兎もあれ母にだけ済ないやうな気持になって来る」と1937年3月20日に記している。

1939年、ついに日米条約が廃棄された。「アメリカの土になるべき運命

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

の吾と思へばさびしいのだ」と、日記に記している。この日、売り上げも極端に少なかった（1939年８月10日）。それでも、徴兵があるわけでもなく、「ただ慰問金を送ることだけの勿体ないくらし」（８月11日）であった。このころの日記には、日米関係の将来を案じて、友人らと話し込む記載が多い。

1940年、アメリカでは批判の強かった日独伊三国協定が締結された。外川は締結の原因はアメリカにあるのではないかと思いつつも、日米戦争の噂に、自分自身の不安を打ち消すかのように、「日米戦争？そんなことは夢だに思はずに、日々の仕事に邁進しやう。地球の不幸よ救はれよ仲秋の月に合唱す」と記している（1940年９月28日）。日々自分のできることを一所懸命に行う。それが彼の人生哲学のように思われる。10月には徴兵登録が始まった。店には二世とメキシコ系アメリカ人が働いていた。一人二人は徴兵されると予想したが、日記には「仮令戦争はあってもなくても［兵役義務］は必要なことなのだ自由の国アメリカと云へどそれは当然の事なのだ」と記している（10月16日）。このころの心境を、外川は

> 木の実紅く／日に日に深みゆく秋／秋風よ！ありがたう／お前に心をゆすぶられて／泌々再考させられる／「思ひ遣り」といふ言葉／こんな良い言葉があつたのに／私は今まで忘れてゐたのだ／否、私ばかりではない／世界中の人々が／隣人への思ひ遣りを／すつかり忘れてゐたからだ／地球をこんなに不幸にさせたのだ
> 太平洋の船の往来も絶えて／泌々と遠きふるさと……／子供達よ、幼けれど／理解してくれよかし／お前達の生れたこの国と／父が生れた日本との／昔のままの親交を祈りつつ／夕雲が茜に染まる裏庭に／黙々と柿の木を植ゑてゐる／父の心のわびしさを。（「柿の木を植ゑる日」1941年10月８日『蜜蜂のうた』254－255）

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

と詠んでいる。自分の力ではどうすることもできない国際情勢に対する不安、もどかしさと、無念さ。黙々と日本種の柿を植えて、その柿が無事生長し、実を結ぶことを願う。けれども、日米関係はさらに暗転して行く。

商売は順調であった。1940年は「去年の暮れの苦しみに比して今年は何と云ふ有難い年か、俺の努力は八方によろこびを呼び起こしてゐるのである」と総括して終わることができた（12月31日）。けれども、日記には日米関係の先行きへの不安と、世界平和を祈る言葉が続く。「日米戦争などは断じて無いと信じてゐる希望ではないこれは俺の観方［ママ］である信念でもある」（1941年３月13日）と断言している。

外川の祈りは通じず、７月25日、日本人資産の凍結を命じる大統領行政命令が下った。外川は、借金を返済し、残金は妻の名で銀行に、また市民権ない縁者の金を市民権をもつその子らの名義で預金した。その日、外川は「本当に安心した」と記している（７月28日）。外川は、「三浦農産商会再建に命をかけた俺だ、そしてそれは見事に成功し、やがて全完［ママ］と云ふ所まで行こうとしてゐる」（10月15日）。彼のがんばりで、借金を完済し、遺託された店も再建した。念願を果たしたのである。

商売がようやく軌道に乗ったそのときに、12月７日、日本軍が真珠湾を攻撃し、日米戦争は始まった。「うそだ嘘だ！！そんな事があるものか必ず何かのデマだろう！と思ってゐたが日米は遂に開戦したのだ。遂に日本が先に宣戦布告したのだ。最も恐ろしいのぞんで居らなかった事がやって来たので、それでもまだ信じられない」。翌８日、通常に商売をしたが、心はいらついた。市民権をもつ二世の子女の名である程度の貯金はしていたので当面生活に困ることはないとはいえ、一世名義の預貯金数千ドルは凍結されている。「遂に来るべき最悪の事が来たのだ涙も出ない」が、「ただただうれしく思ったのは此処に書きつくせぬ或る外人の親切であった」（12月９日）。周囲の主だった人々は拘引され、店と自分の運命に一喜一憂

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

しつつ1941年は終わった。

結びにかえて

外川は自分の詩について、「時折閃めく素晴らしい感覚が／俺を大詩人に妄想させる／だが　当底［ママ］俺の詩は／この不格好な労働靴から／脱することは出来ないのだ」と語っている（「詩作日記」『詩集』203－204）。確かに、彼の詩には日常生活の一コマを切り取ってみせる、きらめく言葉はある。しかし、そのきらめきが発した光が続かない。メッセージを一つに凝縮するための、そぎ落としの作業が不足している。突き詰めて行く緊迫感が感じられない。外川はむしろ聞き上手だったと聞くが、その詩は饒舌すぎる。日記を読む限り、反省の人であり、精進の人である。その詩も推敲に推敲を重ねたとは思われるが、それでもなお、自らが苦労して見つけた言葉を、切り捨ててしまう冷徹さに欠けていたように思われる。

けれども、「この不格好な労働靴から／脱することは出来ない」彼の詩は、その「不格好な」さが魅力である。一日中はき続け、かなりの病気の時にしか脱ぐことのできない「労働靴」から生まれた詩には、「労働靴」だけが生みだすことのできる喜怒哀楽がある。力がある。

外川は、日本では、一家の大黒柱として、一家を支える糧を得られなかった。挫折を体験していた。アメリカでも金儲けのために「暗き方へと伸びて」行くだけであった。不況の時代に結婚し、子供を持ち、日米の家族を支えるためには「太い根が一本必要だ」と自覚した時、アメリカが彼の家になった。

彼の詩は抵抗の詩ではない。日々の生活苦に吐息をつくが、その吐息は流れ出すだけで、大きなうねりを生み出すことはなかった。アメリカを家としたときに、その家の土台をひっくり返すつもりはまったくなかったのである。ただ、太い根を下ろそうと努力したのであった。しかし自覚的努

NII-Electronic Library Service

Shirayuri College

力の結果、彼は「亡者」を脱し、アメリカにホームを創り始めていた。

引証文献

外川明『詩集』（ロサンゼルス　外川明）1932年。

外川明『詩と随想　蜜蜂のうた』（東京アポロン社）1962年。

NII-Electronic Library Service